

8月のことば
 情緒の安定⑥ ～葛藤^{かつとう}の処理2 「心の力」

この夏休み、小学生達と早朝読書をしようかと思う。只し、本は日本人の伝記と限定。つまり、どれも国の為に自らの困難を乗り越えて人々の幸福に寄与した人の話しである。

言いかえると、「思いどおりにならない葛藤をうまく処理し、それがかえって大きな力となり、人々に幸を与えた人の話し」である。

・人が心の力を得る時の法則…

^{しゃよくそくだいよく}
 「捨欲即大欲」

例えば甲子園という舞台上で負けた球児が、高校野球という小さな世界の欲を捨てた時に、もう一つ大きくプロとして人生の勝者になるのだという欲を持つに至るような事や…

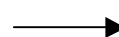
又、受給されるべき食料が自分に回って来なかった際に、“よし、喰わずに頑張ろう”と覚悟を決めた途端、「世の中の食べられない人の思いに報いてやろう。」と天下を相手とする大欲が芽生えるといった事等。

「しんぼう」

社会は思いどおりにならない事ばかり…　そこでまず辛抱できるか？
 辛いことにじっと耐え忍んで努力すれば、やがて心の中に「心棒」という精神の柱ができ、その結果「信望」が集まる。金や武力で世は動かぬ、信望で動く。
 (伝記はいずれもこれらの法則で展開)

夏の読書は小学生の心に大きな力を与えるでしょう。
 しかし、集中して読書ができるのは情緒の安定が大前提。又、心に力をつけることができるのは上手な葛藤の処理能力。
 よって保育園時代の「生活」と「遊び」が上手くできているかどうかで、差は開く。
 (『7月のことば』参照)

正しい心



この土台が崩れてはなりません。